



ちょうかくちょうさ 釣り 獲調査でみられたヤマメの行動

すいさんぎじゅつ ないすいめんしけんじょう たんざわすいけい ふる せいそく
水産技術センター内水面試験場では、丹沢水系に古くから生息する
てんねん しゃしん たんざわざいらい ほ ぜん ゆうぎょ しょくようぶんや
天然ヤマメ（写真1 丹沢在来ヤマメ）の保全と、遊漁や食用分野での
かつよう む けんきゅう すす
活用に向けた研究を進めています。

ぜんこくてき ようしょくぎょ ほうりゅう こうざつ
ヤマメは全国的に養殖魚の放流がなされており、これらと交雑のな
てんねん ざいらい きちよう ないすいめんしけんじょう けんきゅう
い天然の在来ヤマメは貴重です。内水面試験場では、これまでの研究で
たんざわ けいりゅういき ざいらい せいそく かくにん
丹沢のいくつかの渓流域で在来ヤマメの生息を確認しています。この
たんざわざいらい たいそく こばんがた はんもん しょうこくてん おお
丹沢在来ヤマメには体側のパーマーク（小判型の斑紋）や小黒点が多い
しょうすう しゅてん がいけんてき とくちょう
こと、少数の朱点があるなどの外見的な特徴があります。

きちよう たんざわざいらい じんこうてき ふ しんぎょ こがた
この貴重な丹沢在来ヤマメを人工的に増やそうとすると、親魚が小型
さいらんすう すく りょうさんか こんなん かだい たんざわ
で採卵数が少なく量産化が困難という課題がありました。そこで、丹沢
ざいらい おす ほうらんすう おお ようしょく めす こうはい
在来ヤマメの雄と抱卵数の多い養殖ヤマメの雌（写真2）を交配したと
たんざわざいらい とくちょう のこ しいく はんてんねん
ころ、丹沢在来ヤマメの特徴を残した飼育のしやすい半天然ヤマメの
りょうさん かのう あき
量産が可能であることを明らかにしました。

はんてんねん ゆうぎょ かつよう けんとう さくねんど さかわがわ
この半天然ヤマメの遊漁での活用を検討するため、昨年度から、酒匂川
ぎょうきょうどうくみあい れんけい じゅうらい ようしょく かせん ほうりゅう
漁業協同組合と連携し、従来の養殖ヤマメとともに河川へ放流して
ちょうかくちょうさ じっし
釣り獲調査を実施しています。

ちょうさ もち はんでんねん ようしょく ないすいめん
調査に用いた半天然ヤマメおよび養殖ヤマメは、いずれも内水面
しけんじょう しいく こたい しいく ようしょく ひと ちか
試験場で飼育された個体です。飼育してみると養殖ヤマメは、人が近づ
く えさ もと よ しゅうせい はんでんねんぎょ けいかいしん つよ
と餌を求めて寄ってくる習性がありますが、半天然魚は警戒心が強く、
すいそうない ひと けはい たい かく けいこう よ
水槽内でも人の気配に対して隠れる傾向があり、寄ってくることはほと
んどありません。

わたし けいりゅうづ けいけん すく ちょうかくしけん しゃしん
私は溪流釣りの経験が少ないのですが、釣獲試験（写真3）をして
みると、放流後の養殖ヤマメの中には人影を恐れず、釣り人が通過した
ちよくご つ し か えさ めじるし はんのう く こたい
直後に釣られたり、仕掛けの餌ではなく目印に反応して食いつく個体も
おり、これが釣獲につながる場面もありました。一方で半天然ヤマメは
なかなかな釣れません。

ちょうさ けっか はんでんねん ようしょく くら つ
これら調査の結果、半天然ヤマメは養殖ヤマメに比べて釣られにくく、
いっさん ちか ざんぞん けいこう かくにん とくせい しぜん
また逸散せずに近くに残存する傾向が確認されました。この特性は、自然
かんきょう てきおうりょく けいかいしん たか しめ しぜんはんしょく きよ
環境への適応力や警戒心の高さを示しており、自然繁殖への寄与も
きたい
期待されます。

かんたん つ たんざわざいらい ゆらい はんでんねん つ ば
簡単には釣れない丹沢在来ヤマメを由来とする半天然ヤマメを釣り場
かつよう つ じょうきゅうしゃ みりよくてき
に活用することで、釣りの上級者にとって魅力的なターゲットとなり、
つ びと ぞうか み こ ほうりゅう おこな ぎょぎょうきょうどうくみあい
釣り人の増加が見込まれます。これにより、放流を行う漁業協同組合
ゆうぎよりょうしゅうえき こうじょう
の遊漁料収益の向上にもつながると考えられます。

はんでんねん しょくざい ようしょく ていきょう
さらに、この半天然ヤマメを食材として養殖・提供することで、
いんしょくてん しゅくはくしせつ ちいき かんこうぎょう れんけい かのう ちいきけいざい
飲食店や宿泊施設など地域の観光業との連携が可能となり、地域経済

の活性化にも貢献することも期待されます。

今後は丹沢在来ヤマメを活用した内水面漁業の振興を推進するため、
養殖業者への半天然ヤマメの種苗生産技術の普及を図り、量産化に
取り組んでいきます。さらに、丹沢在来ヤマメの付加価値を高めるためのブ
ランド化や量産魚の食用普及についても取り組みを進めていきたいと思
っています。

内水面試験場 主任研究員 相川 英明



写真1 丹沢在来ヤマメ（パーマークや小黒点が多く、少数の朱点がある）



写真2 養殖ヤマメ♀（パーマークや小黒点が少なく、朱点が無い）



しゃしん ちょうかくちょうさ つ
写真3 釣獲調査で釣れたヤマメ